

古英語強変化動詞 (V)

森 基雄
Motoo Mori

森 (2004, 2007) において扱った古英語強変化動詞の 1～3 類が基本的には e (～ o ～ ゼロ) プラス共鳴音プラス子音という単純な語根構造に還元できるのに対し、今回扱うものは 1～3 類とは語根構造が異なる 4、5 類である。4 類の語根構造は語根母音プラス単一の流音または鼻音、5 類のそれは語根母音プラス単一の阻害音であるが、その語根母音については 1～3 類のように印欧祖語のアプラウトに全体としてそのまま還元してとらえることができるかどうかは従来からしばしば疑問視されてきた。そして中でも特に注目すべき点は 4、5 類の過去形における長母音 Gmc ē¹ の起源についてであろう。本稿ではこの点も含め古英語の 4、5 類の成立と発達について、他の同系諸言語における実例や状況と比較しながら考察してみたい。

4 類

(a) 語根構造が語根母音プラス流音 r のもの: er ~ ær ~ ǣr ~ or (OE *beran* ‘to bear’ ~ *bær* ~ *bæron* ~ *boren*, OS, OHG *beran* ~ *bar* ~ *bārun* ~ *giboran*, ModHG *gebären* ~ *gebar* ~ *gebaren* ~ *geboren*, Go *bairan* ~ *bar* ~ *bērun* ~ *baurans*) < Gmc *er* ~ *ar* ~ *ē¹r* ~ *ur* < IE *er* ~ *or* ~ *ēr?* ~ *r* (対格単数 Gk *pa-tér-a* ‘father’ ~ 対格単数 *eu-pá-tor-a* ‘born of a noble sire’ ~ 主格単数 *pa-tér* ‘father’ ~ 与格単数 *pa-trá-si* ‘father’; Gk *dérō* ‘schinde’ ~ *dorós* ‘Schlauch’ ~ アオリスト *édarēn*)。

さらに *beran* の強変化動詞外の同根語にも視野を広げてみると: Gmc **bermōn* > *beorma* ‘Hefe’; Gmc **berþran* > *beorþor* ‘Nachkomme, Geburt’; Gmc **barmaz* > *bearm* ‘bosom’; Gmc **barnan* > *bearn* ‘child’; Gmc **buriz* > *byre* ‘son’; Gmc **burdiz* > *gebyrd* ‘Geburt’; Gmc **buratjanan* > *boretan* ‘schwingen’; Gmc **bē¹rō* > *bǣr* ‘Bahre’。

beran の過去時制

		直説法	仮定法
単数	1 人称	<i>bær</i>	<i>bǣre</i>
	2 人称	<i>bǣre</i>	<i>bǣre</i>
	3 人称	<i>bær</i>	<i>bǣre</i>
複数		<i>bǣron</i>	<i>bǣren</i>
分詞		<i>boren</i>	

直説法単数 1、3 人称 *bær* は o- 階梯を反映する Gmc **bar* に由来し、語根母音 *æ* は AFB (Anglo-Frisian Brightening、アングロ・フリジア明音化) による前舌化の結果である。直説法単数 2 人称の場合、1～3 類と同

様に古ノルド語、ゴート語では語根母音が1、3人称 *bar* のそれと同一であり、完了の接辞を伴う *bart* であるのに対し、OE *bære* (OS, OHG *bāri*) の接辞は1～3類のそれと同じくアオリストの接辞 IE *-es* に由来するとされ、語根母音も1～3類と同じく直説法複数と仮定法のそれに一致する。ただしこの場合1～3類がゼロ階梯を反映するのに対し（例えば2類の OE *bude*, OS *budi*, OHG *buti* < OE *bēodan*, OS *biodan*, OHG *biotan* ‘to command’）、4類では前記のように延長階梯 IE *ē* を思わせる Gmc *ē¹* を反映する。過去分詞は1～3類と同じくゼロ階梯を反映する。

OE *scieran* ‘to cut’ ~ *scear* ~ *scēaron* ~ *scoren* (OHG *skeran* ~ *skārun* ~ *giskoran*) では語根母音が *e*, *æ*, *æ* に代わり *ie*, *ea*, *ēa* となっているのは、語頭の Gmc *sk* が口蓋化により OE *sc* [ʃ] となり、この *sc* が二重母音化を引き起こした結果である。

(b) 語根構造が語根母音プラス流音 *l* のもの : *el* ~ *æl* ~ *æ¹* ~ *ol* (OE *stelan* ‘to steal’ ~ *stæl* ~ *stælon* ~ *stolen*, OS, OHG *stelan* ~ *stal* ~ *stālun* ~ *gistolan*, ModHG *stehlen* ~ *stahl* ~ *stahlen* ~ *gestohlen*) < Gmc *el* ~ *al* ~ *ē¹l* ~ *ul* < IE *el* ~ *ol* ~ *ē¹l*? ~ *l̥* (OIr *celim* ‘verberge’ ~ Go *halja* ‘hell’ ~ Lat *cēlare* ‘verbergen’ ~ Go *huljan* ‘verhüllen’ ; Gk *stéllō* ‘equip’ < **steljō* ~ *stólos* ‘equipment’ ~ 完了 *éstalka*)。

stelan の強変化動詞外の同根語にも視野を広げてみると : Gmc **stalō*- > *forstalian* ‘sich wegstehlen’ ; Gmc **stalō* > *stalu* ‘Diebstahl’ ; Gmc **stalōn* > *gestala* ‘Mitschleher’ ; Gmc **stul*- > *stulor* ‘Diebstahl’。

(c) 語根構造が語根母音プラス鼻音 *m* のもの : OE *niman* ‘to take’ ~ *nōm*, *nam* ~ *nōmon*, *nāmon* ~ *numen* (OS *niman*, *neman* ~ *nam* ~ *nāmun* ~ *ginoman*, *ginuman*, OHG *neman* ~ *nam* ~ *nāmun* ~ *ginoman*, ModHG *nehmen* ~ *nahm* ~ *nahmen* ~ *genommen*, Go *niman* ~ *nam* ~ *nēmun* ~ *numans*) < Gmc *em* ~ *am* ~ *ē¹m* ~ *um* < IE *em* ~ *om* ~ *ēm*? ~ *m̥* (Gk *témenos* ‘heiliger Bezirk’ ~ *tómos* ‘Stücke’ ~ *étmagon* ‘ich schnitt’)。

OE *niman* は IE、Gmc *e* が *bindan* ‘to bind’ < IE **bhendh-* のように鼻音プラス子音の前だけでなく単一の鼻音 *m* の前でも *i* となるという古英語での音変化を反映していると思われる唯一の例であろう。

niman の過去形は単数にも複数にもそれぞれ2つの形があるが、そのうち他のゲルマン語に一致する本来の発達形は単数で *nam*、複数で *nōmon* であり、後者における語根母音 *ō* は Gmc *ē¹* が鼻音の前では *ō* となるという正常な発達を反映している。しかし Hogg (1992: 154-155) の主張するように、単数で *a*、複数で *ō* という交替は、同じ4類で前記の *beran*、*stelan* のような他の大多数の過去形における単数で *æ*、複数で *æ* という長短のみによる交替からは逸脱したものであったため、単数も複数も *ō* (< Gmc *ō*) を有する6類 (*faran* ‘to go’ ~ *fōr* ~ *fōron* ~ *faren* など) の影響で単数としては本来の *nam* のほかに複数と母音が同じ *nōm* も形成されて一方で、単数 *nam* からは通常の4類の単数と複数との間での母音の長短のみによる交替に一致させた複数 *nāmon* も形成されたものと考えられる。

語根構造が語根母音プラス鼻音 *n* のものとしては OE *stenan* ‘stöhnen’ (Gk *sténō* ‘seufze, stöhne, beklage’) ~ 過去単数 *stæn* < Gmc *en* ~ *an* < IE *en* ~ *on* (Lat *genu* ~ Gk *gónu* ‘knee’) が見られるのみである。Gmc *e* は、前記の *niman* の場合とは異なり、この *stenan*、そして *cwene* ‘woman’ (OS, OHG *quena*, OIr *ben*) のように単一の鼻音 *n* の前では無変化であった。また本来 Gmc *a* は鼻音の前ではまず鼻音化され、AFB による前舌化は受けな以上、*stenan* の過去単数の本来の発達形は *stæn* ではなく **stan* となるはずである。従って *stæn* は同じ4類の他の大多数の動詞の不定詞と過去単数との *e* ~ *æ* という交替への類推による発達形であろう。

そして *niman* と同じく語根構造は語根母音プラス鼻音 *m* ではあるが、現在時制がゼロ階梯である OE *cuman* ‘to come’ ~ *cōm* ~ *cōmon* ~ *cumen* (OS *kuman* ~ *quam* ~ *quāmun* ~ *kuman*, OHG *queman* (*cuman*, *coman*))

~ quam ~ quāmun ~ queman (quoman), ModHG kommen ~ kam ~ kamen ~ gekommen, Go qiman ~ qam ~ qēmun) がある。過去複数 cōmon の語根母音 \bar{o} は Gmc \bar{e}^1 が鼻音の前では \bar{o} となるという本来の発達を示すものである。過去単数の語根母音は他のゲルマン語と同じく本来 Gmc a の反映が期待される場所であるが、これも前記の niman の過去形と同様 6 類の影響により複数と同じ \bar{o} を有する cōm となったと考えられる。

過去複数の語根母音である Gmc \bar{e}^1 は IE \bar{e} に対応することから、しばしばアプラウトの延長階梯を反映するとされるが、語根構造が語根母音プラス単一の流音または鼻音であるという点で 4 類と同じ語根構造を有する過去現在動詞の現在単数で 4 類の過去単数と同じ \bar{o} -階梯の OE sceal 'shall', man 'remember' の複数 は 4 類と同じ Gmc \bar{e}^1 の反映ではなくゼロ階梯の sculon, munon であり、このことは他のゲルマン語についても全く同じである。また現にサンスクリット語で cumān と同根の完了形の単数は \bar{o} -階梯の 1 人称 jagama (<IE *g^we-g^wom-X_{2e})、3 人称 jagāma (<IE *g^we-g^wom-e) (= OS, OHG quam, Go qam) に対し、複数 1 人称ではゼロ階梯の jagmima (<IE *g^we-g^wm-) となっている。従って Ramat (1981: 163) の言うように、4 類の過去複数も同様に例えば OE bāeron, stāelon, nōmon, cōmon ではなく *buron, *stulon, *numon, *cumon のようにゼロ階梯の Gmc ur, ul, um を反映するのが本来の発達ではないだろうか。

OE breccan 'to break' ~ bræc ~ bræcon ~ brocen (OS brekan ~ brak ~ brākun ~ brokan, OHG brehhan ~ brah ~ brāhun ~ gibrohhan, ModHG brechen ~ brach ~ brachen ~ gebrochen, OFris breka ~ brek ~ brēken ~ bretsens, Go brikan ~ brak ~ brukans) は、語根母音に後続する単子音が阻害音であるため、後述の spreccan 'to speak' (過去分詞 spreccen) と同様、Wright & Wright (1925³: 270)、Campbell (1959: 312) の言うように、その本来の所属は 4 類ではなく後述の 5 類であったと考えられるのであるが、母音に関してのみ見る限りでは古英語だけでなく古サクソン語、古高地ドイツ語の場合も 4 類として分類され、5 類として分類できるのは古フリジア語の場合のみである。さらに breccan と spreccan では語根母音に先行する子音群のうち語根母音に隣接するものは流音 r であるという点では共通しているが、過去分詞の語根母音に 5 類の特徴である不定詞と同じ Gmc e ではなく Gmc u を反映する \bar{o} を有するのはなぜか spreccan ではなく breccan の方である。

さらに過去分詞に関して言えば、このように breccan が 4 類として発達してきた以上、過去分詞はゼロ階梯の IE *bh₂rgonos に由来し、そしてこれは本来 Gmc *burkanaz (> OE *borcen) となるべきところであり、また現にいったんはそうになっていたかもしれないが、変形として大きく逸脱した形を避けるために音位転換した Gmc *brukanaz (> OE brocen) となったものと考えられる。この点については Banta (1964)、Voyles (1992: 259)、Lass (1994: 118)、Mailhammer (2007: 68) が同様の指摘を行なっている。すなわち語根母音に先行する子音群のうち語根母音に隣接する子音が共鳴音、特に流音 r である場合、過去分詞の母音の揺れ (Gmc u か e か) に伴う所属の揺れ (4 類か 5 類か) がよく見られる。また共鳴音として r の代わりに l を有する同様の例として hleccan 'to unite' ~ hlocen がある。

次に取り上げる 5 類もまた現在時制と過去時制における語根母音の分布については、過去分詞の語根母音が現在時制と同じ Gmc e を反映することを除けば 4 類と同じである。

5 類

(a) 語根構造が語根母音プラス阻害音 (C) であるもの: eC ~ $\bar{a}eC$ ~ $\bar{a}eC$ ~ eC (OE spreccan 'to speak' ~ spræc ~ spræcon ~ spreccen, OS sprekan ~ sprak ~ sprākun ~ gisprokan, OHG sprehhan ~ sprah ~ sprāhun ~ gisprohhan, ModHG sprechen ~ sprach ~ sprachen ~ gesprochen, OFris spreka ~ sprek ~ sprēken ~

spretzen) < Gmc eC ~ aC ~ ē¹C ~ eC < IE eC ~ oC ~ ēC? ~ eC? (Lat sedeō 'I sit' ~ solium 'throne' (< *sodium) ~ sēdēs 'seat', ~ sēdō 'I set'; Lat tegō 'I cover' ~ toga 'a covering'; Gk pétomai 'I fly' ~ poté 'flight'; 対格単数 Lat pedem 'foot' ~ 対格単数 Gk póda ~ 主格単数 Lat pēs)。

(b) j-現在動詞: iCC ~ æC ~ æC ~ eC (OE biddan 'to ask' ~ bæd ~ bādon ~ beden, OS biddian ~ bad ~ bādun ~ gibedan, OHG bitten ~ bat ~ bātun ~ gibetan, ModHG bitten ~ bat ~ baten ~ gebeten, Go bidjan ~ bad ~ bēdun; OE sittan 'to sit' ~ sæt ~ sēton ~ seten, OS sittian ~ sat ~ sātun ~ gisetan, OHG sizzen ~ saz ~ sāzun ~ gisezzan, ModHG sitzen ~ saß ~ saßen ~ gesessen, Go sitan (< *setan) ~ sat ~ sētun)。

j-現在動詞 OE biddan、sittan では spreca とは異なり、語根母音は i となっているが、それが IE, Gmc e に由来することは明らかであり、それぞれ不定詞は Gmc *bedjanan, *setjanan に由来し、語根後位置の j が語根母音 e > i のウムラウトと語根末子音の重子音化を引き起こした後に j 自体が消失した結果である。

sprecan, biddan の過去時制

	直説法	仮定法
単数 1 人称	spræc, bæd	spræce, bāde
2 人称	spræce, bāde	spræce, bāde
3 人称	spræc, bæd	spræce, bāde
複数	spræcon, bædon	spræcen, bāden
分詞	sprecen, beden	

sprecan の強変化動詞外の同根語にも視野を広げてみると: Gmc *sprekan > gesprec 'Gespräch'; Gmc *sprekōn > gespreca 'Ratgeber'; Gmc *sprekula- > sprecol 'redselig'; Gmc *sprē¹k- > spræc 'Sprache'、また biddan については Gmc *bedan > bed 'Gebet'; Gmc *bedō > bedu 'Bitte, Gebet'; Gmc *bedula- > bedol 'bittend'; Gmc *bē¹d- > ēapbāde 'leicht zu erbitten'、そして sittan については Gmc *setan > set 'Sitz'; Gmc *setla- > setl 'Sitz'; Gmc *satan > gesæt 'Sitzung'; Gmc *satjanan > settan 'to set'; Gmc *sē¹t- > sēt 'Hinterhalt', andsæte 'feindlich'; Gmc *sōtan > sōt 'soot'; Gmc *ni-st-az > nest 'nest'。

4、5 類の過去時制の語根母音でまず問題となるのが IE ē に一致する過去複数の Gmc ē¹ であり、これが真に印欧祖語の延長階梯に由来するものであるかどうかについては疑問視する見方が多い。

この Gmc ē¹ に一致する延長階梯 IE ē を反映する対応形としてしばしば Lat veniō 'I come'、sedeō 'I sit'、legō 'I gather'、vehō 'I carry' の完了形 vēnī、sēdī、lēgī、vēxī のような例が挙げられる。Wright & Wright (106-107)、Buck (1933: 292)、Brunner (1960-2², I : 44)、Krahe & Seebold (1967²: 40-41)、Krahe & Meid (1969⁷, I : 71)、Ramat (1981: 163) 等々従来の多数意見としては、この Gmc ē¹ が延長階梯 IE ē に由来するとしている。その根拠として例えば Wright & Wright はラテン語の完了形以外に 4、5 類には本稿でもこれまで挙げてきたような、時制の変化以外での同根語として IE ē を反映すると思われる多くの実例があること、そして強変化動詞とは語源的に無関係な名詞間でのアプラウトによる延長階梯を反映するものとして Go qinō (OE cwene, OS, OHG quena) 'woman' に対する Go qēns (OE cwēn, OS quān) 'wife, woman'、対格単数 Lat pedem 'foot'、Gk patéra 'father' に対する主格単数 Lat pēs、Gk patér のような実例もあることを挙げ、Gmc ē¹ をあくまでも延長階梯の反映としてとらえている。

5類には母音で始まる OE *etan* 'to eat' ~ *ǣt* ~ *ǣton* ~ *eten* (OHG *ezzan* ~ *āz* ~ *āzzun* ~ *gi(g)ezzan*, ModHG *essen* ~ *aß* ~ *aßen* ~ *gegessen*, Go *itan* ~ *ēt* ~ *ētun*, Lat *edō*, Gk *édō*) という例もあり、過去の単数も複数も語根母音が Gmc **ē¹* である点が異色である。ただし *etan* の強変化動詞外の同根語には Gmc **etula-* > *etol* 'gefräßig'; Gmc **atjanan* > *ettan* 'abweiden'; Gmc **ē¹tan* > *ǣt* 'Speise, Fraß'; Gmc **ē¹tjōn* > *hlāfæta* 'Kostgänger' があり、e- 階梯、o- 階梯、延長階梯がそろって実証される。同様に OE *sittan* の過去単数には複数と同じ Gmc **ē¹* を有する OE *sēt* (OS *sāt*, OHG *gisaaaz*, ON *sāt*) という形もあり、Brunner (1960-2², II: 200) はこの **ē¹* を複数からの転用であるとしているのに対し、逆に Feuillet (1981: 204-205)、Ramat (164) は単数と複数の語根母音がともにラテン語と同様 IE **ē* に一致する 5類のこの例が単数に Gmc *a* を有するものよりも古いタイプを反映するとしている。そして単数における Gmc *a* を Feuillet は 4類からの借用であるとし、Ramat は 1~4類への類推により導入されたとする一方、一致して彼らは、そして Mailhammer (2007: 65) も、過去現在動詞に見られる本来のゼロ階梯に代わる 4類の過去複数の Gmc **ē¹* は逆に 5類から導入されたものと考える。そして Makaev (1964: 41) も既に 4類の **ē¹* の存在については同じ見解を示しており、さらに **ē¹* が導入された要因について、彼は過去現在動詞の現在語幹と 4類の過去語幹を語形変化として明確に区別しようとする傾向が反映された結果であるとしている。

Feuillet (207) はこれは延長階梯に由来するものではなく、すべて重複音節を伴う完了形の縮合に起因すると考える。すなわち Lat *vēni*、*sēdi* は e- 階梯 CeCeCi- (実証される重複形では *tetendi* 'stretched', *pependi* 'suspended, was suspended' のように語根母音は確かに e- 階梯である) > CeCi- のように、連続した開音節にある 2つの e を有する重複形における語根初頭の子音の脱落により縮合が生じた結果であり、そして 5類の Gmc **ē¹* もこれと全く同じ音過程の結果であり、5類で語根が母音で始まる唯一の動詞 OE *etan* の過去形 *ǣt*、*ǣton* についても全く同様 **e-ed-* に由来するとしているが、Feuillet のこの見解は一般に支持を得られていないようである。

Mailhammer (80) は複数の OE *ǣton* は喉音を保持していた最古の段階と考えられる IE **Xied-* (>**ed-*) のゼロ階梯の重複形 IE **Xie-Xid-* (>**ēd-* > Gmc **ē¹t-*) に由来するとしている。単数が複数と同じ長母音を有する OE *ǣt* となっていることについて Brunner (200) は複数からの転用と見なしているが、Mettke (1993²: 185) は単数の **ē¹t-* は o- 階梯の重複形 **e-at-* の縮約の結果であるとし、Mailhammer (79) も同様の見解を示している。

Ramat (163)、Bammesberger (1984: 58)、Mailhammer (79) が指摘するように、5類の過去複数も 1~4類と同様に本来はすべてゼロ階梯を反映すべきところであったと思われる (そして同様のことは 5類の過去分詞についても言えるであろう)。現に 5類と同じ語根構造を有する Skt *papati* 'he flies' (Gk *pétomai*) の完了形として単数では o- 階梯の *papāta* (<**pepot-*)、複数ではゼロ階梯の *paptima* (<**pept-*) という例が見られる。しかし 'to eat' の場合は別として、もし実際にゼロ階梯のまま進化したと仮定すると、例えば OE *metan*、Go *mitan* 'to measure' < IE **med-*; Go *giban* 'to give' < IE **ghebh-* の過去複数 は実際の OE *mǣton*、Go *mētun*; Go *gēbun* ではなく、**(me)mdnt* > Gmc **untun(p)* > OE **untun*、Go **untun*; **(ghe)ghbhnt* > Gmc **gbun(p)* というように変化形としては形態論的には完全に逸脱したものになってしまうであろう。

しかし 5類そのものにも強変化動詞外の同根語としてゼロ階梯に直接由来する実例が存在しないわけではない。その実例としては OE, OS, OHG *nest* 'nest' (Lat *nīdus* 'nest', Arm *nist* 'Sitz, Lage') < IE **ni-sd-os* があり、IE **ni-* は 'down' を意味し、IE **sd-* は IE **sed-* 'to sit' (> Gmc **setjanan* > OE *sittan*) のゼロ階梯である。もし仮に実際の過去複数 Gmc **sē¹tun* (> OE *sǣton*)、過去分詞 Gmc **setanaz* (> OE *seten*) ではなく、ゼロ階梯がそのまま語根となる過去複数 (IE **(se)sdnt* >) Gmc **stun(p)?*、過去分詞 (IE **sdonos* >) Gmc **stanaz* のような形がいったん存在していたとしても、このような形が **setjanan* の変化形として容認可能なものであったとは考えにくい。

そして5類の変化形でも同根語でもないケースで、OE *neht*、OS、OHG *naht*、Go *nahts* ‘night’ < IE **nokt-* (Lat *nox*, *noctis*) のゼロ階梯でありながら、そうであるが故に一見すると同根語とは思えない形になってしまっている。OE *ūht(a)*、OS、OHG *ūhta*、Go *ūhtwō* ‘dawn’ < IE **nkt-* のような実例も現に存在しているのである。Ramat (163) は、5類の変化形としてはこのような事態を回避するため、延長階梯の導入に切りかえるに至ったと考え、これはラテン語の完了形と同じ形式であり、この延長階梯による時制の変化も印欧祖語に既に習慣として存在していたとしている。

また Ramat (163)、Mailhammer (69) は5類の過去分詞も本来ならば過去複数と同様ゼロ階梯のはずであるが、不定詞と同じ *e-* 階梯となっているのは過去複数と同じ事情によるものと考ええる。

Lass (1994: 109, 155) は、ゲルマン語派の過去形の *ē*¹ もラテン語の完了形の *ē* も延長階梯 IE *ē* を反映し、どちらもアオリストに由来するとしている。さらに Beekes (1995: 236) は、*s-*アオリストを反映する実例として、IE **wegh-* ‘to carry’ の延長階梯に基づく (IE **X_{1e}-wēgh-s-*>) Skt *avākṣam*、OCS *věsь*、Lat *vēxi* ‘carried’ を挙げている。従って *s-*アオリストはラテン語の完了形の *ē* の起源の1つと言えるであろう。

Sihler (1995: 581-582) によると、このほかラテン語の完了形の長母音の直接の起源としては、語根が母音で始まる動詞で *ēgi* < **e-ag-* (*agō* ‘drive’), *ēdi* (*edō* ‘eat’), *ēmī* (*emō* ‘buy’) のように延長階梯ではなく重複音節と語根との縮約に由来すると思われるもの、**se-sd-* > *sēdi* (*sedeō* ‘sit’) という代償延長に由来する可能性を示すもの、*fūdi* < *fundō* ‘pour’ (OE *gēotan*, Go *giutan*), *vicī* < *vincō* ‘defeat’ (OE *wīgan*, Go *weihan*), *vidī* < *videō* ‘see’ (OE, Go *witan* ‘to know’), *fūgi* < *fugiō* ‘flee’ (Gk *phēugō*), *fēcī* (アオリストの Gk *éthēka* ‘put’ とともに IE **dheX₁-k-* に由来する) < *faciō* ‘do’ のように現在形が短母音でゼロ階梯であるのに対し完了形が長母音で正常階梯であるもの、などである。*fūdi*, *vicī*, *vidī*, *fūgi* について Buck (293) は *ū*, *ī* は IE *ou*, *oi* であったと考えるが、Sihler (581-582) は IE *eu*, *ei* であったとしている。しかしラテン語では IE *eu*, *ei* の反映は IE *ou*, *oi* のそれと融合し同一の長母音 *ū*, *ī* となってしまっているため両者の区別はつきにくく、正常階梯であったこと以上は知ることが困難であり、現在と完了の語根母音の違いは *u* ~ *ū*, *i* ~ *ī* という長短でしかとらえられなくなっている。そしてさらに完了形全般においてその長母音の真の起源そのものが正確には把握しにくくなっていると言えるであろう。Sihler (582, 584) は、結果としてラテン語では現在形に短母音を、完了形に長母音を有するという1つの形式が確立し、さらにその完了形の語根母音の起源が以上のいずれにももともと由来しないはずの他の多くの動詞にもこの形式が拡大されたとしており、例えば *lēgi*, *vēni* もこのようにして形成された可能性があると考ええる。もしそうであれば、5類の Gmc *ē*¹ とラテン語の完了形の *ē* はいずれも延長階梯 IE *ē* に由来するとして両者の起源を完全に同一視する Wright & Wright、Buck、Ramat のような見解は成り立ちにくくなるのではないだろうか。

結局 Mailhammer (84) が主張するように、5類の Gmc *ē*¹ は ‘to eat’ のゼロ階梯の過去複数 IE **X_{1e}-X_{1d}-* > **ēd-* > Gmc **ē¹t-* が出発点であり、語根が子音で始まる他の5類動詞の過去複数もゼロ階梯であったが故に生じた前述の ‘to measure’, ‘to give’ のケースのような逸脱した形になってしまったところに Gmc **ē¹t-* の影響により Gmc *ē*¹ を語根母音として導入することでこの異常な状況が解消されたのかもしれない (**etan* : **ē¹tun* = **metan* : X、従って X = **mē¹tun*)。

同じく Gmc *ē*¹ を反映しアオリストに由来するとされる直説法過去単数2人称 (*spræce*, *bæde*) についてもまた元来は過去複数と同様ゼロ階梯に由来する逸脱した形であったと思われることから、‘to eat’ のアオリストで同じくゼロ階梯の IE **X_{1e}-X_{1d}-* > **ēd-* > Gmc **ē¹t-* の影響かもしれない。しかし1~3類における直説法過去単数2人称の語根母音は過去複数のそれと同じくゼロ階梯に由来することから (OE *bude* ‘you commanded’ < IE **X_{1e}-*

bhudh-es, cf. Gk éphuges ‘you fled’ < IE *X₁e-bhug-es), 5 類の直説法過去単数 2 人称はこの 1 ~ 3 類の影響により、自身の過去複数と同じ母音、すなわち Gmc ē¹ の反映を導入したとも考えられる。

前記 4 類の最後でも述べたように、OE sprekan は brecan とは異なり、また対応する OS sprekan、OHG sprehan とは異なり、5 類として分類される。5 類にはまた sprekan と同じく語根母音に先行する子音群のうち語根母音に隣接するものが流音 r である動詞に drepan ‘to slay’ ~ dræp ~ dræpon ~ drepēn (dropen) (OHG treffan ~ traf ~ trāfun ~ gitroffan, ModHG treffen ~ traf ~ traffen ~ getroffen, ON drepa ~ drap ~ dröpu ~ drepinn) ; screpan ‘to scrape’ ~ scræp ~ scræpon ~ screpen ; wreca ‘to avenge’ ~ wræc ~ wræcon ~ wrecen (OHG rehhan ~ rah ~ rāhhun ~ girohhan, ON reka ~ rak ~ rōku ~ rekinn, Go wrikan ~ wrak ~ wrēkun ~ wrikans) があり、注目すべきは drepan の過去分詞には drepēn のほか 4 類の特徴を有する dropen も見られることである。また語根母音に先行する子音群のうち語根母音に隣接するものが流音 r ではなく鼻音 n である cnedan ‘to knead’ ~ cnædon ~ cnenen (OHG knetan ~ knat ~ giknetan) には 4 類の特徴を示す過去分詞 cnoeden (< *cnodin) もある。

そして語根末子音がヴェルネルの法則に起因する子音交替を示す例として以下のものがある : cweþan ‘to say’ ~ cwæþ ~ cwædon ~ cweden (OS quethan ~ quath ~ quādon ~ quedan, Go qīþan ~ qap ~ qēþun ~ qīþans) ; wesan ‘to be’ ~ wæs ~ wæron (OS wesan ~ was ~ wārun, OHG wesan ~ was ~ wārun (wāsun) ~ weran, ModHG sein ~ war ~ waren ~ gewesen, Go wisan ~ was ~ wēsun) ; 縮約動詞 sēon ‘to see’ ~ seah ~ sāwon ~ sewen (OS sehan ~ sah ~ sāwun (sāun ~ sāhun) ~ sewan (sehan, seen), OHG sehan ~ sah ~ sāhun (sāgun) ~ gisewan (gisehan), ModHG sehen ~ sah ~ sahen ~ gesehen, Go saihwan ~ sahw ~ sehwan ~ saihwans) ; gefēon ‘to rejoice’ ~ gefeah ~ gefægon (OHG gifehan ~ gifah ~ gifāhun) ; plēon ‘to risk’ ~ pleah。

不定詞 sēon は Gmc *sehwanan > WGmc *sehan > (割れ) POE *seohan > (母音間の h の消失) *seoan > (a の消失、代償延長) sēon という音過程の結果であり、現在時制においては語根末子音 h は命令法単数 Gmc *sehw > WGmc *seh > (割れ) OE seoh、直説法単数 2、3 人称 WGmc *sehis (t)、*sehið > (i-ウムラウト) POE *sihist、*sihiþ > (割れ) POE *siohist、*siohiþ > (i-ウムラウト、中略) OE siehst、siehþ (OHG sihist、sihit、ModHG siehst、sieht) に明確に残っている。

cweþan, sēon の過去時制

	直説法	仮定法
単数 1 人称	cwæþ, seah	cwæde, sāwe
2 人称	cwæde, sāwe	cwæde, sāwe
3 人称	cwæþ, seah	cwæde, sāwe
複数	cwædon, sāwon	cwæden, sāwen
分詞	cweden, sewen	

過去時制では seah は Gmc *sahw > WGmc *sah > (AFB) POE *sæh > (割れ) seah という音過程の結果であり、直説法単数 2 人称、複数、仮程法、分詞の語根末子音 w はヴェルネルの法則による (Gmc hw >) [ɣw] に由来し、語根母音が通常の æ ではなく ā となっているのは後続の w の影響によるものである。

しかし 5 類では語根末子音が Gmc s であるものについては、ヴェルネルの法則に起因する語根末子音の交替

[s] ~ [z] (> [r]) を反映しているのは古英語では *wesan* のみであり、それ以外のものについてはなぜかそれは見られない: *lesan* 'to gather' ~ *læs* ~ *læson* (OS *lesan* ~ *las* ~ *lāsun* ~ *gilesan*, OHG *lesan* ~ *las* ~ *lāsun* (*lārun*) ~ *gileran* (*gilesan*), ModHG *lessen* ~ *las* ~ *lasen* ~ *gelesen*, Go *lisan* ~ *las* ~ *lisans*) ; *nesan* 'to escape' ~ *næs* ~ *næson* ~ *nesen* (OS *-nesan* ~ *-nas*, OHG *-nesan* ~ *-nas* ~ *-nārun* (*-nāsun*) ~ *-neran* (*-nesan*), ModHG *genesen* ~ *nas* ~ *nasen* ~ *genesen*, Go *-nisan* ~ *-nas* ~ *-nēsun*)。

giefan 'to give' ~ *geaf* ~ *gēafon* ~ *giefen* (OS *geban* ~ *gaf* ~ *gābun* ~ *gigeban*, OHG *geban* ~ *gab* ~ *gābun* ~ *gigeban*, ModHG *geben* ~ *gab* ~ *gaben* ~ *gegeben*, Go *giban* ~ *gaf* ~ *gēbun* ~ *gibans*) ; *gietan* 'to get' (複合語にのみ見られる) ~ *geat* ~ *gēaton* ~ *gieten* (OS *getan* ~ *gātun*, OHG *gezzan* ~ *gaz* ~ *gāzun* ~ *gezzan*, Go *gitan* ~ *gat* ~ *gētun* ~ *gitans*) では全変化形において、後続の語根母音で前母音 *e*, *æ*, *æ* の影響による語頭子音 Gmc [ɣ] の口蓋化に起因する [j]、そしてさらにこの [j] に起因する語根母音の二重母音化 (*e*, *æ*, *æ* > *ie*, *ea*, *ēa*) を示す。

さらに *j*-現在動詞としては前記の *biddan*, *sittan* のほか *licgan* 'to lie' ~ *læg* ~ *lægon* ~ *legen* (OS *liggian* ~ *lag* ~ *lāgun*, OHG *liggen* ~ *lag* ~ *lāgun* ~ *gilegan*, ModHG *liegen* ~ *lag* ~ *lagen* ~ *gelegen*, Go *ligan* (< **legan*) ~ *lag*)、そして過去時制において5類本来のものから逸脱した形を有する *þicgan* 'to partake' ~ *þeah*, *þāh* ~ *þegen* (ON *þiggia* ~ *þā* (< **þah*) ~ *þōgu* ~ *þeginn*)、*fricgan* 'to ask' ~ *gefrægen*, *gefregen*, *gefrigen* もある。*licgan* は IE **legh-* (Gk *lékhomai* 'lege mich', *lékhos* 'Lager', OE *leger* 'Grab') > Gmc **[ley]janan* > (*j* による語根末子音の重子音化とそれに伴う閉鎖音化、*i*-ウムラウト) POE **liggian* > (*j* による *gg* の口蓋化) OE *licgan* という音過程の結果であり、*cg* は [dʒ] を表す。*læg* [læj] (< Gmc **[lay]*) では語末の *g* [j] は前母音 *æ* の影響によるものであり、*legen* [lejen] (< POE **[leyæn]* < Gmc **[leyanaz]*) では [ɣ] が前母音にはさまれていたため [j] となっている。他方 *lægon* では *g* は [ɣ] のままであった。

þicgan の場合、同根語と思われる OIr *techaid* 'hat, besitzt, enthält, überwindet', Lith *tenkù*, *tèkti* 'hinreichen, zukommen, zufallen, sich ereignen', そして過去単数 *þeah* (< **þah*) から明らかなように、語根末子音は IE *k* に由来し、森 (2007: 66, 67) で取り上げた *frignan*, *fregna* 'to ask' (Lat *precor* 'bitten') と同根である *fricgan* (< Gmc **[fre]janan*) の場合もそうであるように、不定詞においても過去複数、過去分詞と同じく語根末子音はなぜかヴェルネルの法則に起因する [ɣ] を反映している。語根母音について言えば、過去単数としては Gmc *a* を反映するという5類本来のものと並んで、なぜか1類の特徴である Gmc *ai* を反映する *þāh* が見られる点も異色である。また *fricgan* の3つの過去分詞のうち正常な本来の発達形と言えるのは *gefregen* であり、これは1類や3類に移行してしまった *frignan* の5類本来の理論的にあるべき過去分詞形として Wright & Wright (269) が仮定する **gefregen* (ON *freginn*, Go *fraihans*) とも当然ながら一致するものである。

参考文献

- Bammesberger, A. 1984. *A sketch of diachronic English morphology*. Regensburg: Pustet.
- Banta, F. G. 1964. "Gothic reflexes of PIE syllabic resonants." *Linguistics* 6, 29-36.
- Beekes, R. S. P. 1995. *Comparative Indo-European linguistics: an introduction*. Amsterdam: Benjamins.
- Brunner, K. 1960-2². *Die englische Sprache: ihre geschichtliche Entwicklung*. 2 vols. Tübingen: Niemeyer.
- Buck, C. D. 1933. *Comparative grammar of Greek and Latin*. Chicago: University of Chicago Press.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Feuillet, J. 1981. "Quelques problèmes de morphologie verbale germanique." *BSL* 76, 201-221.
- Hogg, R. M. 1992. "Phonology and morphology." *The Cambridge history of the English language. I: the beginnings to 1066* (R. M. Hogg, ed.), 67-167. Cambridge: Cambridge University Press.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Krahe, H. & W. Meid. 1969⁷. *Germanische Sprachwissenschaft. I, II*. Berlin: de Gruyter.
- Krahe, H. & Seebold, E. 1967². *Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen*. Heidelberg: Winter.
- Lass, R. 1994. *Old English: a historical linguistic companion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mailhammer, R. 2007. *The Germanic strong verbs: foundations and development of a new system*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Makaev, E. A. 1964. "The morphological structure of Common Germanic." *Linguistics* 10, 22-50.
- Mayrhofer, M. 1972. *A Sanskrit grammar*. English translation by G. B. Ford. University, Alabama: University of Alabama Press.
- Mettke, H. 1993⁷. *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- 森 基雄. 2000. 「古英語強変化動詞 (I)」『奈良産業大学紀要』第16集, 129-37.
- 森 基雄. 2001. 「古英語強変化動詞 (II)」『奈良産業大学紀要』第17集, 123-32.
- 森 基雄. 2004. 「古英語強変化動詞 (III)」『奈良産業大学紀要』第20集, 61-68.
- 森 基雄. 2007. 「古英語強変化動詞 (IV)」『奈良産業大学紀要』第23集, 59-68.
- Ramat, P. 1981. *Einführung in das Germanische*. Tübingen: Niemeyer.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.
- Sihler, A. L. 1995. *New comparative grammar of Greek and Latin*. New York-Oxford: Oxford University Press.
- Voyles, J. B. 1992. *Early Germanic grammar: pre-, proto-, and post-Germanic languages*. San Diego, etc.: Academic Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.